

# 《国語総合》

時間 90分

## 【問題一】

(30)

問一

これから文章を読みあげます。その文章をできるだけ正確に書き取って下さい。文章は全部で二回読みます。一回目は、ゆっくりと読みますので、鉛筆をもって書き取ってください。句読点も読みあげます。また、段落の前では「行を改めて下さい」と言います。すぐに漢字を思い出せないときはひらがなで書き留めておいて下さい。二回目は、一回目より速く読みます。ここでは、直すところをチェックしたり、簡単な訂正をして下さい。2回目の朗読が終わった後、しっかりと書き直して下さい。書き直しの時間は約3分です。

問二

もう一度文章を読みあげます。どんな情景、どんな光景が表現されてきましたか。あなたの頭に浮かんできたすべてのイメージを簡単な絵にして書いてみてください。小学生が描くスケッチ程度の絵で十分

です。絵が上手であるかそうでないかは気にする必要がありません。目安時間は7分です。

## 【問題二】

次の文章を読んで、以下の問いに答えなさい。

人生、何が起きるか、わからないものだ。

ア 自分が、殺人者やレ

イプ犯と面と向かい、詩の授業をすることになるとは、夢にも思わなかった。彼らから、人間を信頼する心を教えてもらうことになる、とも。

首都圏から奈良に移住したばかりの二〇〇六年、明治の名煉瓦建築である、奈良少年刑務所を見たくて、一般公開日に訪れたのがきっかけだった。そこで、わたしは受刑者たちの作品に出会った。

1

振り返りまた振り返る遠花火

夏祭り胸の高まり懐かしむ

その1 繊細さに驚いた。その脇に飾られていた水彩画も、煉瓦の一枚一枚が、ひどく几帳面に描かれたものだった。凶暴凶悪な犯罪者、といったイメージとは、かけ離れていた。「実は、ここにいる子たちの多くが、<sup>2</sup>ぶきようで引つ込み思案の子や、<sup>3</sup>こどくな子なんです」と話しかけて

くれたのは、刑務所の教官だった。彼らがモンスターではないこと、なんとか社会に適応してほしいと願って更生教育を行なっていることなど、熱心に話してくれた。わたしは **イ** 「何かお手伝いできれば」と、名刺を差し出していた。その翌年、刑務所から **4** 要請され、講師をすることになった。

**ウ**、内心、怖じ気づいていた。受講生は、強盗、殺人、レイプ、放火、薬物違反者だというではないか。

「被害者の方々には、申し訳ないけれど、ここにいる受刑者たちに、『よくここまで生き延びてきたね』と言ってあげたい。それほど **5** 過酷な暮らしをしてきた子が多いんです。ひどい虐待を受けたり、育児放棄されたり。発達障害を理解されなくて、ひどいいじめを受けてきた子もいるんです。加害者になる前に、被害者であったような子たちなんです」

統括官は、その子たちの心を、童話や詩で **6** 耕してやってほしいと言う。無理だ、と思った。しかも授業は月一回、一時間半だけ、たった六回で終了するという。ありえない。人を殺すところまでこじれてしまった人の心を、童話だの詩だのという **A** ヤワなもので、癒せるものか。

**エ**、熱心に頼まれ、根負けして、引き受けることにした。それでもまだ怖くて、夫と二人で行くことを許してもらい、二人一組で講師になった。

どんな怖い人が授業にくるのかと思ったが、やってきたのは、むしろ、

とりつく島のない、交流不能、といった感じの子たちだった。極端に気が弱くて担当教官の脇から離れられない子。目がうつろで、まったく人の話を聞いている様子のない子。うつむいたまま、暗い顔をしている子。おどおどして落ち着かない子。なぜかふんぞり返っている子。これで授業が成り立つのかと、不安になった。

彼らは、**オ** 「落ちこぼれ」の集まってくる刑務所のなかでも、

**カ** 「落ちこぼれ」てしまう人々だった。話すことが極端に **7** にがてで、作業所でも、みんなと足並みが合わない。そのために、周りの者がいららして作業所のお荷物になる。そんな子ばかりだ。だから、**B** 一筋縄ではいかない。一クラス一〇名。そこに、わたしたち二人組の講師と、刑務所の教官が二人。机を円く並べて、互いの顔が見えるようにして授業を進める。

一コマ目と二コマ目は、絵本を読んで、それを朗読劇として演じてもらう。お **8** 芝居とはふしぎなもので、演じる方も見る方も、だんだんと一体感が生まれてくる。

そうやって下地作りが済むと、こんどはいよいよ詩を書いてもらう。なんでもいいよ、愚痴だって構わない、何を書いてきても、この教室では絶対にしかったりしないよ、と約束する。なんにも書くことがなかったら、好きな色について書いてね、と言った。

すると、こんな詩を書いてきた子がいた。

くも

空が青いから白をえらんだのです

驚いた。<sup>9</sup>しよりやくの効いた、なんといい美しい一行詩だろう。詩の授業では、まず作者に自分の詩を朗読してもらおう。この子にも、朗読してもらった。ところが、薬物中毒の<sup>10</sup>後遺症があつて、うまく読めない。うつむいたまま早口で読むので、「前を向いて」「ゆっくり」と、何度かやり直してもらつて、やつとみんなの耳に聞こえるように読めた。

そのとたん、<sup>11</sup>せいだいな拍手が湧いた。すると、その子が突然「先生！」と手を挙げたのだ。<sup>12</sup>ふだんは、自分から発言などしない子だから、びつくりした。「ぼく、話したいことがあるんですが、話してもいいですか」と言う。もちろんですよ、どうぞ、どうぞ、と言うと、いきなり、

**C** 堰を切つたように語りだした。「ぼくのおかあさんは、今年で七回忌です。おかあさんは体が弱かった。けれど、おとうさんは、いつもおかあさんを殴っていました。おかあさんは、亡くなる前にぼくに『つらくなくなった空を見てね、わたしはそこにいるから』と言いました。ぼくは、おかあさんを思つて、この詩を書きました」。

**D** あまりの話に、あつけに取られていると、受講生から次々に手が挙がつた。「ぼくは、〇くんは、この詩を書いただけで、親孝行やつたと思ひます」「ぼくは、〇くんのおかあさんは、きっと雲みたいに真っ白で清らかな人だったんだと思ひました」「ぼくは、〇くんのおかあさんは、雲みたいにふわふわでやさしい人かなつて思ひました」「ぼくは、ぼくは」と言いよんだ子は、「ぼくは、おかあさんを知りません。でも、この詩を読んだら、空を見たら、ぼくもおかあさんに会えるような気がしました」と言つて、わつと泣きだしてしまつた。みんなが、その子を慰めた。<sup>13</sup>

友の拍手で、一人の子の心の扉が開く。すると<sup>13</sup>呼応したように、次々にみんなが心を開き、語りだす。思ひがけないやさしさが溢れだしてくる。奇跡だと思つた。

ところが、この奇跡は、教室内にとどまらなかつた。母を知らないと言ひしたその子は、刑務所に入つてから、自傷行為の絶えない子だつた。それが、この日を境に、びたりと自傷行為が止まつたというのだ。<sup>14</sup>えがおまで出るようになり、あのお荷物扱いされてた作業所で、副班長にまであつたという。

わたしは、まだ、ビギナーズブックだと思つていた。**キ** うまくいっただけだ。

ところが、同じようなことが次々起こるのだ。今期で、もう一二期にな

る。一〇〇人以上の受刑者を見てきた。変わらなかった子はいない。大きく伸びた子もいれば、少ししか **15** ころかのなかった子もいるが、一人として、よくならなかった、という子はいない。

ひどいチック症状を呈していた子が、自分の詩を発表して、みんなの感想を聞き終わると、目の前でびたりとチックが止まったこともあった。ふんどり返っていた子が、やはりみんなの感想を聞き終わると、きちんとお行儀よく座っていたこともある。自分から、薬物中毒だった時代のことを告白して「なんでもないしあわせ」を感じられる自分を取り戻したいと、告白してくれた子もいた。

自己表現をする、それを聞いてもらう、受けとめてもらったと実感する。それだけで、人はこんなにも変わるものだと知った。押し殺していた感情が芽生え、うれしい、かなしい、がわかるようになる。やさしさが自然と溢れてくる。人を殺したような者のなかに、こんなやさしさがあるのかと驚いた。 **E** 人間とは、捨てたものではないと思った。そして、本人が詩だと思って書き、詩だと受けとめる者がいれば、どんな言葉でも詩になり、詩には、人の心を開く力があるのだと確信した。

心を開くと、人の気持ちを思いやれるようになる。そうやってはじめて、彼らは罪に向きあうこともできるようになっていく。

なんて **16** かんたんなことだろう。逆に見れば、彼らはいままで、たった

それだけの「受けとめ」してもらえなかった、ということなのか。

**F** この授業で、わたしたち指導者側は、ほとんど何もしない。お行儀悪く座っていても、注意もしない。彼らは、彼らのなかで育っていくのだ。互いの関係性のなかで、やさしさや人間らしさを育てていく。人は、人の輪の中で育つのだと、つくづく感じた。わたしたち指導者側にできるのは、安心して心を開ける場を作ってあげることだけだ。

**ク**、ここが一番大切なのだが、その関係性は、月一回のこの授業だけで作れるわけではない、ということだ。彼らは二四時間、刑務所にいる。刑務所の教官は、刑務所のなかでさえ落ちこぼれてしまうような彼らを、日々見守っている。毎朝、「おはよう」と一人ひとりの房の前で声をかける。返事があってもなくても、声をかけ続ける。面接をし、ノートでやりとりをする。そんななかで、頑なな彼らの心を少しずつ解きほぐしていくのだ。

ぼくらの「先生」は、何かを押しつけ、型にはめようとする人々ではない。ほんとうのぼくを見ようと、本気でぼくの未来を心配してくれている人だ。そうわかってもらって、はじめて、彼らは心を開いてくれる。

わたしが出会ってきた刑務所の教官たちは、みんなそんな人だった。受刑者たちに更生してほしいと本気で思っている。仕事とはいえ、ここまで本気で他人のことを思う人がいるだろうか、と感動する。仕事と人生とが

一つになって、それはもう仕事というより、「祈り」であり「願い」であるような日々を送っている。犯罪者を更生させるのは、きびしい北風ではなく、あたたかな真実の愛なのだ。

あまり光の当たらない仕事だが、世の中には、そんな「先生」たちがいることを、ぜひみなさんに知ってもらいたいと思う。

(寮実千子「詩が開いた心の扉」 池上彰編『先生！』2013年 より)

問一 1～16の傍線部について、漢字にはふりがなを、ひらがなには漢字を書きなさい。  
(1×16＝16)

問二 ア～クにふさわしい言葉を a～j から選び符号で答えなさい。

(1×8＝8)

選択肢

- a むしろ    b ところが    c さらに    d けれど    e まさか  
f 思わず    g それほど    h たまたま    i もともと    j そして

問三 傍線部 A～D はどのような意味ですか。選択肢の中から選び、番号で答えなさい。  
(2×4＝8)

- A 童話だの詩だのだのというヤワなもので  
① 人生の教訓をしっかりと示すもの  
② ものごとの道理をきちんと教えるもの  
③ 世の中で大切にされる正義を示すもの  
④ 柔和なもの

- B 一筋縄ではいかない  
① 簡単にはいかない  
② 単純で分かりやすい方法でないとうまくいかない  
③ 強制力のある方法でないとうまくいかない  
④ どんな方法でもうまくいかない

- C 堰を切ったように語りだした  
① ポツリポツリと  
② 遠慮がちに少しずつ  
③ どつとあふれるように  
④ 滑らかにすらすらと

- D あまりの話に、あつげに取られていると  
① 話の内容が理解できずにいると  
② 話を聴いて驚きあきれていると  
③ 話を聴いて恐ろしくなっていると  
④ 話の内容に大変興味をもっていると

問四 傍線部E、Fについて答えなさい。(4×2＝8)

E 人間とは、捨てたものではないと思つた。

著者がそう考える理由を書きなさい。

F この授業で、わたしたち指導者側は、ほとんど何もしない。お行儀悪く座つていても、注意もしない。

指導者側はなぜここでほとんど何もしないのですか。その理由を示す部分を文中から抜き出しなさい。

問五 この文章の中であなたが最も心をひかれた箇所を抜き出しなさい。また、その箇所を選んだ理由を一二〇字以内で書きなさい。

(10)

### 【問題三】

次の①～⑩の熟語にふりがなをつけ、その熟語の意味を選択肢ア～タより選び、符号で答えなさい。(2×10＝20)

① 十人十色

② 我田引水

③ 因果応報

④ 枝葉末節

⑤ 試行錯誤

⑥ 四面楚歌

⑦ 一長一短

⑧ 八方美人

⑨ 悪戦苦闘

⑩ 日進月歩

### 【選択肢】

ア 一つのものごとには良い面もあれば悪い面もある

イ 美人はだれからも好まれるものだ

ウ いろいろな方法を繰り返し試みて、失敗を繰り返しながら解決に近づくこと

エ 好みや考え方などは人によってそれぞれ違いがあること

オ 死にもぐるいの苦しい戦い

カ 誰かのために自分の欲求をひっこめること

キ よく思われようと誰にでも愛そうよくふるまうこと

ク まわりが敵や反対者ばかりで一人の見方もいないこと

ケ ものごとは終わってみなければ善し悪しの評価はできない

コ 自分にだけ都合のよいようにものごとを進めること

サ ものごとは進歩しているように見えるが、実際は退歩しているものだ

シ ものごとの本質は細部に宿るものだ

ス ものごとが毎日絶え間なく進歩していること

セ ものごとの中心ではなく、それほど大切でない細かいことから

ソ 良い行いには良いむくいがあり、悪い行いには悪いむくいがあるということ

タ 失敗ばかりしてはものごとの解決には至らない

#### 読み上げ文章

夏に育つ植物たちは、猛烈な暑さと闘っています。その闘うためのしくみの一つは、植物が自分のからだを冷やすという冷却能力です。太陽の強い光を受けている葉っぱは、水を蒸発させることで、からだの温度を冷やします。私たちが、暑いときに汗をかくのと、同じしくみです。一グラムの水を蒸発させると、五八三カロリーの熱が奪われていきます。多くの水を蒸発させればさせるほど、からだを冷やすことができます。

そのため、夏の昼間、植物は多くの水を使います。長い間、森や山に育っている樹木は、広い範囲に根を張りめぐらせているので、多くの水を吸収することができます。また、そんな樹木たちの下に生きる小さな木や草は陰になつているので、強い光が当たりません。だから、水不足になることはありません。